

D-8 子どもの偏食傾向と養育態度について
茨城大教育 中澤きみ

目的 子どもの偏食が発育上どのような影響をもたらすか、その偏食の原因がどのような家庭的背景から生じるのかについて解明するために、次の事項について分析を試みた。

方法 4才から7才にいたる572名の幼児・児童を対象とし、その母親に調査用紙を配布し回答を求めた。調査内容は「子どもの摂食調査」「食事時の母親の態度調査」「子どもに対する母親の態度調査」等である。

結果 摂食調査より、子どもの食品嫌悪傾向を数量化する方法と工夫し、個人別の食品嫌悪傾向度を算出し、このパーセントイル置換算表を作成した。この食品嫌悪傾向度を中心として他の諸変数との関係を分析した結果、その主なものを指摘すると次の如くである。食品嫌悪傾向度とKaup指数、及び病歴との関係はどれも有意な相関を見出すことはできなかった。母親の養育態度と食品嫌悪傾向度との間には相関が認められ、特に母親の食事時における服従的態度は、食品嫌悪傾向度を高い、民主的態度は、食品嫌悪傾向度を低めている。亦、一般的養育態度の因子得点と食品嫌悪傾向度との間にも有意な関係が認められ、食品嫌悪傾向度の上位群は、賤かこの因子得点が高く、服従と拒否との因子得点の高い母親群に多く出現する傾向が見出された。一般に子どもの食品の嫌悪傾向が、偏食傾向として問題視されるが、本研究結果から、食品嫌悪傾向度の値は、栄養学的、或は医学的レベルでの問題に直接的につながることではなく、むしろ母親の養育態度のindexと見なせる値であることが明らかにされた。